

芦原義信の宿題「隠れた秩序」への一つの回答 —日本人の空間秩序感覚に関する考察—

篠原 修

フェロー会員 工博 特定非営利活動法人GSデザイン会議(〒113-0033 文京区本郷 6-16-3,
E-mail:shinoharaosamu@gmail.com)

建築が作り出す外部空間と街並みにこだわり続けた芦原義信は、日本の都市に顕在的な秩序を見出す事が出来なかった。しかしそこには都市を支える何らかの秩序が存在する筈だと考え、それを「隠れた秩序」と命名して模索を続けた。本論は芦原が宿題として残した「隠れた秩序」に対する筆者の一つの回答である。

キーワード； 芦原義信, 隠れた秩序, 景観把握モデル, 秩序感覚, 美意識

1. 外部空間と街並みにこだわり続けた、稀有な建築家・芦原義信

芦原義信と言っても今の若者には馴染みはないだろうが、土木の景観にとっては恩人の一人と言うべき人物である。芦原は、1969（昭和44）年に母校の東大建築学科に設計担当の教授として戻った。現在では当たり前のようになっている、第一線で活躍している建築家を大学に招聘して学生の設計指導に当たらせるという人事の第一号であった（芦原の後は楨文彦、香山壽夫、安藤忠雄、隈研吾などと続く）。東大退官は1979年。退官の最終講義の当日に合わせて、当時話題になった「街並みの美学」を岩波から出版するという格好良さだった。筆者は当時農学部の助手で、この最終講義を聴講することができた。工学部11号館の講堂は超満員だった。何故芦原が土木の景観にとって恩人の一人であるかという点、土木の景観工学が学問的に一応の自立を果たした樋口忠彦のドクター論文の審査に建築学科から加わり、その価値高く評価して土木の教授陣を説得したからである。芦原の存在がなければ樋口のドクターは危うく、今に続く景観研究グループはなかったかも知れぬのである（樋口のドクター論文は、後に「景観の構造」として技報堂から出版される）。

芦原は1942（昭和17）年9月の繰り上げ卒業後、海軍に招集され、南方で敗戦を迎えて帰国、その後フル

ブライトの奨学金でハーバードに留学する。設計活動に従事する傍ら、1962（昭和37）年に「外部空間の構成」を出版する。建築が作り出す外部空間を論じた著作であった。外部空間の質をその充実度によって、Pスペース、Nスペース、P-Nスペースに分類し、外部空間構成に果たす建築の役割を論じた。本人の弁によればイタリアの広場に触発されたのだと言う。このP、Nスペース論は、ゲシュタルト心理学の言う「図」と「地」で説明することもできる。景観をやっていればゲシュタルト心理学は必須の教養だったから、芦原の論は何の抵抗もなく頭にスッと入った。驚いたのは、建築の外観や内部空間を論じはするが、建築が作り出す外部空間には一向関心がないようにみえる建築界にあって、芦原のような建築家が存在していたことであった。一般の建築家は建築周りの空間を芦原の言う「残部空間」として、顧みないのが通例であったのだから。勿論、外部空間を意識した建築家がいなかったわけではない。日本のモダニズム建築を切り拓いた前川國男は世田谷区役所や京都会館で広場を作り出していたし、丹下健三も自身の建築が引き立つようという限定付きではあったが、群衆が集まることの出来るマス・ヒューマンスケールの広場を広島市の平和記念公園、代々木の国立屋内競技場で実現させていた。しかし、時代が戦後から高度成長に移るにつれ、民主主義の、市民の為の広場論は背景に退いていき、超高層ビルや再開発が建築の前面に出て、外部空間への関心は

薄れてしまう。この様な状況にあっても、芦原の外部空間への関心は途切れる事なく、1979（昭和 54）年に先述の「街並みの美学」を世に問うたのであった。

1962 年出版の「外部空間の構成」以来の芦原の 20 年来の外部空間や街並みへのこだわりは、1986（昭和 61）年の「隠れた秩序—二十一世紀の都市に向けて」で転機を迎える。どう考えてみても、芦原には、混沌とした日本の街並みには西欧諸国の街並みに見られるような「秩序」が見出せなかったのである。しかし、混沌と見える日本の街並みにも何らかの秩序はあるはずである、そうでなければ、日本の街並みには救いがない。こんなに活発で生き生きとした日本の都市に秩序がない訳はない。国際人、芦原はそう考えて、日本の都市の秩序は西欧のように顕在化はしてはいないが、厳然と存在するとして、それを「隠れた秩序」と命名したのである。以来、その隠れた秩序を模索して 20 年以上、芦原の苦闘は続くのであった。1962 年の「外部空間の構成」から数えると、ほぼ 40 年に渡って芦原の外部空間、街並みへの意志は持続したのであった。流行を追い、モデルチェンジを繰り返す戦後の建築界にあって芦原の持続力は驚嘆に値する事柄である。そして芦原の外部空間や街並みに対する思いが如何に切実なものであったのかも痛感するのである。

2. 芦原の言う「隠れた秩序」の要約

芦原は日本の都市や街並みを何とか混沌から救い出そうと考えて、「隠れた秩序」論に行き着いた。ただ、その隠れた秩序が何であるのかを示す事は出来なかった。筆者は「風景の意味論」を構築しようとする勉強の過程で、後に詳しく述べる熊谷高幸と北山修の日本語論に出会い、長年の間心に引っかかっていた芦原の残した宿題、つまり隠れた秩序とは何か、を解くヒントを得た。それをこの論説で展開しようとする。隠れた秩序とは何か、芦原の苦闘の結果は以下のように要約する事が出来る。

[芦原の隠れた秩序の結論]

(1) それは日本の都市を支える機能システム、社会システムである。

郵便、電話、衛生、治安などの全てに渡って、日本の都市ほど安全、便利で効率的な都市はない。つまり日本の都市の秩序は外に現れる「形式」にあるのではなく、「内容」にあるのだ。と芦原は結論づける。この秩序ある内容がどうして形式に反映しないのか、芦原は日本の土地所有を原因にあげる。方向

も高さもバラバラに建てられるビルはその結果だとする。確かに機能システムや社会システムは目に見えない隠れた秩序ではある。だが、それは芦原が求めた隠れた秩序ではなかった筈である。隠れた秩序とは言いながら、形に結びつくものを求めていた筈なのだ。

(2) 日本の都市の部分には垂全体（ホロン）が存在していて、それが全体に通じる共通因子（DNA）を持ち、垂全体が組み合わせられて秩序を形成しているのだとする。

ただし、その共通因子は与えられたパラメータにより様々な形で出現するので、西欧のような整った形とはならないのだ、とする。ここで芦原はフラクタル理論を援用し、部分部分での適応の結果が全体としては秩序がないように見えてしまうのだ、とする。日本人は「部分発想」が根本にあって、その増殖が全体を形作るのだと言う。つまり、混沌のように見える日本の都市も仔細に見ればその部分には秩序があり、その部分の秩序はある時点でのパラメータにより自在に変わるので、A の部分の秩序と B の部分の秩序は同じではないから、部分の集合としての全体には秩序が見出せないのだ、とする。日本の都市を読み解く論理としては説得力がある。ただやはり、この結論では「全体に通じる共通因子（DNA）」が何であるのかの説明はない。部分にはそれぞれに秩序があり、しかしそれらは同質の秩序ではないので、全体はやはり無秩序である、という結論になってしまう。

(3) 西欧の秩序は、左右対称性、正面性、直線性（幾何学性）に基づいている。日本にはこの秩序感覚はない。従って日本の都市には西欧諸国のような秩序はない、とする。

移り変わるのが日本の美学であり、それは「新陳代謝の美学」である、とする。この秩序感覚の相違の指摘はもともとであるが、ではその「新陳代謝の美学」が律する秩序とは何かに、芦原が答える記述はない。

(4) 「どうにもならない」。これが隠れた秩序に対する芦原の説明の一つであった。「東京の美学」や「秩序への模索」などの後期の著作のそこそこに吐露される。説明の放棄であった。芦原も疲れたのだろう。芦原の隠れた秩序に対する模索は、日本人の部分発想や左右対称性・正面性・直線性を嫌う秩序（美学）などについてのキーワードを提供し、更には芦原の持論である「床の文化」こそが日本人の秩序感覚を律する根本であるという言説など示唆に富むも

のであった。しかし、芦原は隠れた秩序を発見する事は出来なかったのである。

3. 日本語という言語からみた空間, もの, 人 (以下空間と記する) の認識—熊谷の日本語論を手がかりに

熊谷高幸の「日本語は映像的である—心理学から見えてくる日本語のしくみ」は、小冊子ながら景観や空間を研究する者にとって極めて示唆に富む著作である。秩序に関係すると考える熊谷の言説を紹介しつつ、我々日本人の空間に対する認識の特徴を整理してみよう。最初に確認しておくが、言語とは、会話においても文章においても同種の言語を使用する人間には通じる、一定の秩序(論理)を有しているという点である。従って、その秩序体系はその言語を使う人々の秩序感覚を典型的に表していると考えられる事が出来る。

(1) コミュニケーションの基本, 3項関係

熊谷の専門は自閉症のコミュニケーションであり、その学問の拠り所は発達心理学である。従って、子供がどのようにして言語を獲得していくのかを課題とする。熊谷は幼児が言語を獲得していく際の基本は、親、幼児とその二人が共に見るもの、の3項関係であるとする。親と幼児がある物を共同注視(共視)して、あれは何、これは何というコミュニケーションを通じて言語を習得していく。このコミュニケーションがやがて文章にも定着して言語体系となる。これはどの言語にも共通する事柄である(図-1)。

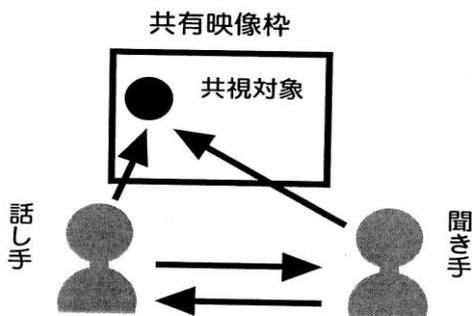
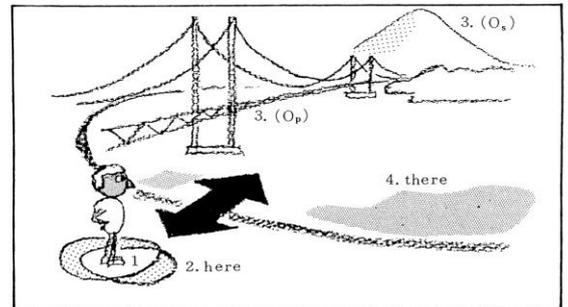


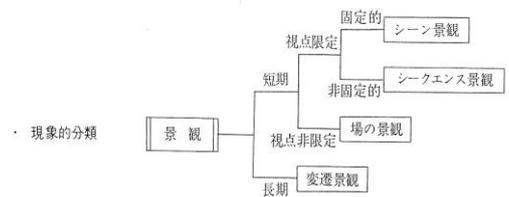
図-1 話し手・聞き手・共有映像の関係図¹²⁾

この関係が成立する為には、見ている映像を共有している必要があり、また同一の視点から物を見ているという意識がなければならない。日本の自閉症ではこの関係が上手く成立せず、指示詞の「こ、そ、あ、ど」が一致しないのだと言う。つまり、会話が上手く出

来ない。熊谷のいう言語の基本は、景観工学の用語で言うと二人で共視する「シーン景観」であるという事になる(図-2)。



景観構成要素		要素の関係性	
1. 視 点 V	2. 視点場 L _{SH}	1. V-L _{SH}	5. L _{SH} -L _{ST}
3. 主対象 O (主対象 O _p , 副対象 O _s)	4. 対象場 L _{ST}	2. V-O	6. O-L _{ST}
		3. V-L _{ST}	7. O _p -O _s
		4. L _{SH} -O	

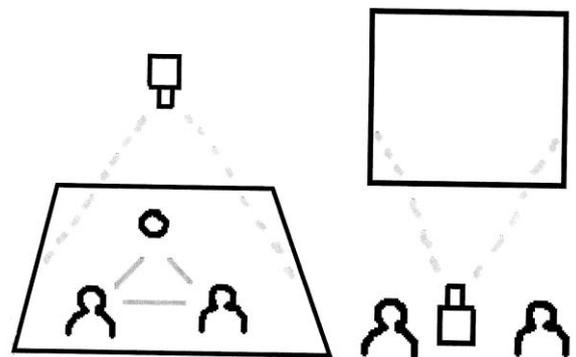


(注) 分類軸 1. 時間
2. 空間
2-1 視点の限定性
2-2 視点の固定性

図-2 景観把握モデル(シーン景観の把握, 改良型)¹⁴⁾

(2) 3項関係の内部視点と外部視点

3項関係が言語習得の出発点である事は、どの言語でも共通であるが、それを言語化する時点で言語により違いが生じてくると言う。熊谷は日本語と英語の違いを、図-3のように表現する。



日本語では話し手は聞き手と共に3項関係の中にいて、共視しているものを表現するので、いちいち私とか僕などと言わない。主語は省略されるのが普通である。また共視が前提になっているので、つま

り同一の物を見ているので、見ている対象についても省略が可能であるとする。熊谷が例に引く文章。日本語では「りんごが欲しい」で通じるが、英語では「I want an apple」となる。誰かを待っている場面では、待っている人が共有されていれば、日本語では「あ、来た」で通じ、英語では「Mr. Yamada coming」と言わねばならない。

つまり、英語では話し手は3項関係の外に出て、表現する構造になっているのである。もう一例、熊谷が引く文章表現の典型。川端康成の「雪国」の冒頭の文章。「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」はサイエンステッカーの英訳では

“The train came out of the long tunnel into the snow country”. 筆者が考えるに、別の英訳も可能だと思うが、サイエンステッカーの表現が英語表現の王道なのであろう。

熊谷によれば、日本語においては私とあなたは特別の関係にあり、英語においてはいくつかの関係の一つにしか過ぎない。これを景観工学の用語で表現すれば、以下のようになる。日本語は現象の視点を基本に、共に見る「シーン景観」を「視点場」を共有しつつ表現する。これに対して英語の表現では視点が固定されていない「観念の視点」を基本に、表現している景観は「場の景観」であるという事になる。「観念の視点」は「俯瞰の視点」と言ってもよい。見られている景観が「場の景観」なのであるから、視点は特定されなくて当然である。

(3) 対象との関係付けと認知の順序

「は」と「が」の使い分けは日本語論でよく話題になる問題である。熊谷はこの使い分けを、話し手と対象との関係付けで次のように明快に論ずる。「は」は話題に関する主題の提示であり、見ている映像の枠組みの明示であるとする。一方の「が」は枠組みの中の対象の選択に使うのだと言う。熊谷は「桃太郎」の話为例に次のように解説する(図-4)。

1. 昔々、あるところに、おじいさんとおばあさん「が」住んでいました。
2. 毎日、おじいさん「は」、山に柴狩に、おばあさん「は」、川へ洗濯に行きました。
3. ある日、おばあさん「が」、川で洗濯をしていると、向こうから大きな桃「が」流れてきました。
4. 桃「は」 どんどん、おばあさんの方に近づいてきます。
5. おばあさん「は」、桃を取り上げ、家に持って帰りました。
6. 夕方、おばあさん「が」待っていると、おじいさん「が」帰ってきました。

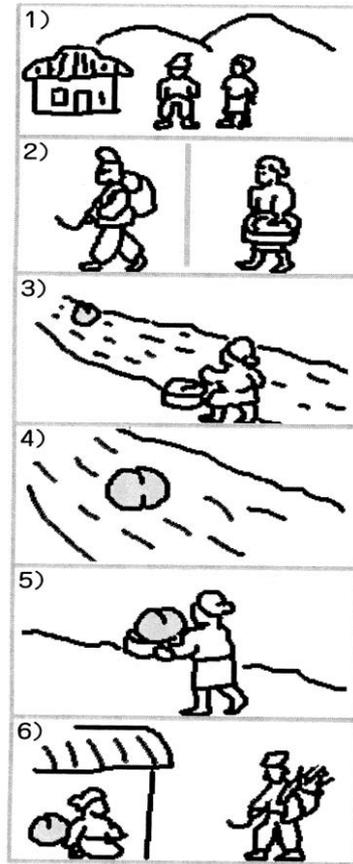


図-4 『桃太郎』映像文脈¹²⁾

第一文では、「昔々、あるところに」で話題にする場面が提示され、その映像の中でおじいさんとおばあさんが、対象として選択される。第二文では、おじいさんとおばあさんの活動が話しの主題となるので、「は」が用いられる。第三文ではおじいさんとおばあさんのうちの、おばあさんが選択されるので、「が」が使われ、主題となる桃が「が」で選択される。

以上の熊谷の論を景観工学の用語で表現すると、「は」は「シーン景観」の提示であり、「が」は「シーン景観」の中の「主対象」の選択となる。

次に、認知の順序の解説に移る(図-5)。熊谷は日

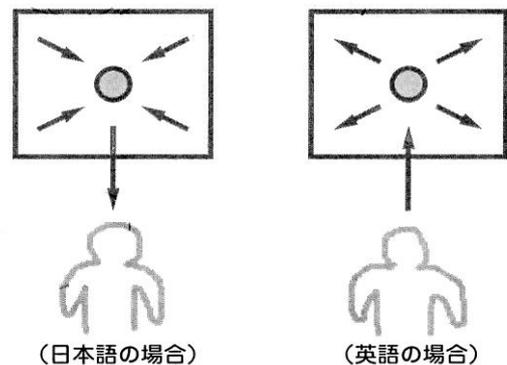


図-5 日本語と英語の順序の違い¹²⁾

本語と英語の語順の違いを解説する。日本語では先づ、時や所を表す言葉で映像の枠組みを提示し、続いて映像の中の出来事や人に進むとする。熊谷の例では、「今朝、駅で、山田さんを見かけたよ」。これが英語では次のようになる。“I saw Mr. Yamada at the station this morning.”。英語では先づ、人や出来事がきて最後に場面が提示されるのである、とする。

つまり、日本語では周辺から中心へ、英語ではその逆に中心から周辺へ、叙述が進むのだ。この叙述の順序は認知のプロセスとパラレルと考えてよいから、景観工学の用語で表現すると次のようになる。日本語では先づ、視点との関係で「対象場」を提示し、次に「対象場」の中から「主対象」を選択する。英語では先づ、視点との関係で「主対象」を選択し、次にその「主対象」がある「対象場」を示すという事になる。この順序を関心の程度で解釈すると、日本語では自分と（そして共に見ている人物も）見ている「シーン景観」の関係が第一に重要で、その中の対象との関係は二次的なものだと考える事ができる。英語では自分と強く関係する人や出来事（主対象）が第一に重要で、それがはっきりして始めて、人や出来事が存在する場面が「対象場」として意識されるのだと言えよう。つまり、日本語は「視点・シーン景観の関係」重視、英語では「主体・対象の関係」の重視である。

このような叙述の違いを、熊谷は日本語は映像文法と同じく、映像共有型であり、英語は対象関係型であるとする。この映像共有型の認知パターンが日本人の写真好きを生み、和歌や俳句を生み出したと言うのが熊谷の説なのだが、それは今勉強中の風景の意味論で別に論ずる事としよう。

4. 日本語風景論—景観把握モデルによる熊谷の日本語論のまとめ

熊谷はその著書の最後で、各国の言語を取り上げて比較を行っているのだが、そこ迄手を広げると話がゴタゴタするので、ここでは英語を西欧諸国の代表言語として日本語との相違をまとめておこう。勿論、その比較は空間認知の問題である。そして先にも述べたように言語が秩序（論理）そのものである以上、それは環境や空間認知の秩序感覚を反映している筈である。

(1) 日本語に表れた認識の特徴

- a. 「シーン景観」が言語表現の基本である。
- b. 視点が特定され、臨場感が重視される。これは「シーン景観」が基本となっている事の反映である。

c. 認識のプロセスは、まず視点との関係で「対象場」が設定され、次に「対象場」の中から「主対象」が選択される。

つまり、a, b, c は現象を重視した「景観的」なものの見方である事を意味する。

d. 「視点場」の共有が重視される。この「視点場」の重視は仲間文化を生み出す。

(2) 英語に表れた認識の特徴

a. 「場の景観」が言語表現の基本である。

b. 視点の特定は重視されず、臨場感よりも客観性が重視される。これは「場の景観」が基本となっている事の反映である。

c. 認識のプロセスは、まず視点（主体）と「主対象」の関係付けが重視され、その次に「主対象」が存在する「対象場」が意識に上る。

つまり、a, b, c は現象ではなく、何と言ったらいいか難しいのだが、現象の背後にある、見る視点によらない存在を重視した「空間的」なものの見方である事を意味する。

d. 視点場は重要な要素ではない。視点場の共有による仲間文化よりも、視点を自由にとる、より汎用性のある表現をとる。

以上の相違は彼我の秩序感覚にも当てはまる、と考える。

5. 日本人の秩序感覚

空間の認識は言語に反映し、一定の秩序となって表れる。言語が秩序を有している以上、その元になっていた認識の仕方にも言語とパラレルな秩序感覚が存在していると考えるのは自然であろう。従って、日本人の空間や人、ものに対する秩序感覚は前項のまとめに従って以下のように記述する事ができる。

日本語の基本が「シーン景観」である以上、日本人の秩序感覚の基本も「シーン景観」にあるに違いない。その秩序感覚は「視点依存の現象」に現れている筈である。これに対して、英語の基本は「場の景観」であり、それは視点に依存しないから、秩序感覚は現象には現れず、「現象の背後にある存在」に現れているはずである。「現象の背後にある存在」とは「空間」である。「空間」は視点とは切れた存在に他ならない。従って、日本人の秩序感覚は以下のように記述できる。

(1)日本人の秩序感覚は「シーン景観」に現れているはずである。つまり、芦原が言うように日本人の秩序感覚は「隠れて」はいない。現前する現象としての景観そのものに日本人の秩序感覚が現れているのだとみなければならない。これが結論の第一である。

(2)繰り返しになるが、もう一步踏み込んで書く。日本人は「シーン景観」に秩序を求め、「シーン景観」が頭の中で統合された「場の景観」には秩序を求めてはいない。つまり、現象としての「部分」に秩序を求め、統合としての「全体」には秩序を求めない。その結果、日本の全体（都市）には秩序が存在しなくとも平気なのである。一方、西欧人は頭の中で統合された「場の景観」に秩序を求め、「シーン景観」には秩序を求めない。つまり、「全体」に秩序を求め、「部分」には重きを置かない。ただし、「全体」に幾何学的な秩序（近代西欧都市）が存在するので、それが現象として現れる「シーン景観」にも秩序が認められるのである。これが第二の結論である。

(3)結論の第三は、芦原が「混沌」と見た、雑然とした風景こそが日本人の秩序感覚なのだと認める事である。そこに秩序がなければ、我々の日常生活は成り立たない筈である。我々は何の不都合も感じないで、やすやすと行動しているのではない。

以上の三項目は確かな結論だと考えている。では、西欧の目から見れば、そして芦原の目から見ても混沌としか映らない風景を、我々日本人は一つの、ただし西欧とは違う、秩序として承認しているのであるか、という問題になる。この理由を解明するのは容易ではない。以下は筆者の仮説である。

[日本人の秩序感覚について]

(1)秩序感覚のベースとしての生態系

日本人の秩序感覚には日本の気候、風土が反映している。より具体的に言うと、縄文時代以来慣れ親しんできた照葉樹林の風景が秩序感覚のベースにあると考える。それでは関東以北が抜けてしまうので、生物多様性の風景がベースになっていると考えてもよい。北海道はこの範囲から外れるが、北海道は文化の点から言うと日本ではなかった。これに対して、西欧は北海道と同じ亜寒帯の景観であり、かつての氷河期の影響もあって、「生物貧様性」の景観である。

生物多様性の景観は多様な動植物が活発に活動し、その結果から生まれた猥雑と言ってもよい雑然

とした世界である。これに対して、生物貧様性の景観は草や灌木のないスッキリとした世界である。我々日本人は旺盛な繁茂が元来の秩序だと考えているのである。従って、ビルが如何に乱雑に建とうが、広告看板や電柱が乱立しようが、それは人間の多種多様な活動が生み出した結果であり、活気のある秩序として受け止めて平気なのである。この雑然には西欧人は秩序を感じる事は出来ない。この違いは、かつて中村良夫がポツンと筆者に漏らした言葉でもある。

(2)日本人の視点場文化

日本人は「視点場」を共有し「シーン景観」を共視する事を重視する。「視点場」共有が一つの文化共有にまで至ると、熊谷の言う「省略の文化」が生まれる。「言わずもがな」の言語活動である。価値観が共有されれば、暗黙の了解が生じて約束事の世界となる。文楽人形では、勿論、人が人形を操るのであるが、黒子の人間は存在しない事になっている。この「省略の文化」の伝統故か、日本人の目には電柱も広告看板も存在しない事になっているのであろう。普段は少しも気にならない。西欧都市に行き帰って来ると、日本の都市の乱雑さに、はたと気づくのである。

(3)日本人の秩序感覚は美意識と同一ではない。

これが一番の大胆な仮説かもしれない。我々日本人とて、日本の都市の雑然とした景観を美しいと思っているわけではない。ただしそれが秩序に外れていると思っているわけではない。この矛盾するような命題から導かれる答えは、秩序感覚が美意識とイコールではない、という点に帰着する。我々は照葉樹林の景観を美しいと思っているわけではない。それが証拠に、理想的な景観を再現しようとしてきた日本庭園には照葉樹林の景観はない。平安貴族の庭園にしる、枯山水の庭園、大名庭園にしる、全て石を立て、必要な高木、灌木のみを植栽し、池を備えてスッキリとした景観を作り出しているのである。照葉樹林の繁茂に戻ろうとする自然の動きは、絶え間ない剪定によって防がれているのである。つまり、日本においては秩序を「洗練」する事によってのみ「美」が実現出来るのである。

「生物貧様性」の西欧においては元来が景観を構成している要素が少ないから、秩序イコール美という図式が成立するのであろう。ここで問題になるのは、何故要素が過多であると「美」とは感じられないのかという点である。筆者の用意している答えは一つ、ゲシュタルト心理学の言う「プレグナンツ」

の法則, 別名「簡潔性の法則」である. この法則が教える所によれば, 「人間は対象をなるべく簡潔な形態として理解しようとする」となっている. ここで言う「人間」は全ての民族に共通するものであり, 「文化」には左右されない. つまり, 人間は簡潔な形を好み, それが美に繋がっているのであろう.

6. 秩序と美, 洗練

芦原義信の宿題に対する回答は, 前項の記述に尽きていると考える. 以下では蛇足的に残された問題についての見当を散文的に述べて終わりとしよう.

芦原がいう西欧の左右対称性, 正面性, 直線性(幾何学性)などの秩序は, デカルト以来の近代主義が生み出したもので, ある意味では時間的にも空間的にも一つの特殊解に過ぎない. ただそこでは, 秩序イコール美という観念が成立していたのであった. その呪縛を脱した今, 冷静になって考えてみれば, それが時代と空間を超えて通用する真理ではない事は容易に分かる. 我々にとって身近なモダニズム建築の四角い箱は, 幾何学的秩序そのものであるが, 少しも美しくはない. 秩序が自動的に美となる訳ではないのである. ただ, 西欧の美の伝統が左右対称性, 正面性, 直線性に基つき, 我が国の美の伝統が何故そうではないのかは, 重い課題として残る. 西欧の美はともかくとして, 我が国の美の伝統がそうではない点について私見を述べてみよう.

我が国においては秩序が洗練された時に美が現れるのだと, 日本庭園を例にとって前項に述べた. 何故それが左右対称性, 正面性, 直線性とならないかの説明は容易である. 日本においては, 自然によって与えられた秩序には, これらの属性がないからである. 日本に限らず, 自然にはこのような属性が現れる事は稀である. イギリス風景式庭園の大家であったハンフリー・レプトンもその著書の中で次のような名言を吐いている. "Nature abhors straight line". であるから, 自然が与えてくれた秩序を洗練して生まれる日本の美には, 幾何学性がありようはない. 非対応性, 奥性, 曲線性が美の基調とならざるを得ないのである. 日本庭園然り, 生花然りで自然の素材を使った芸術は須らくそうなる.

この美意識が人工物にも貫徹したのが, 日本人の美意識の特徴なのであると考える. 律令時代に唐から移入した幾何学の美学も, 日本の美意識により変容した. 左右対称性, 正面性, 直線性そのものだった寺院, 都京(平城京, 平安京)も非対称, 奥性の形となった. 都市や建築などの人工物も日本人の美意

識に律せられたのである. 近代になって西欧からもたらされた, 左右対称性, 正面性, 直線性の権化であるヴィスタ・アイストップも, アーバン・デザインに採用される事は稀で, 採用された場合にも樹木などの「障り」によって正面性が消されるのであった.

このような根強い美意識の伝統を大事にするなら, そして所詮それから逃れられないと観念するなら, 日本の美意識でこれからの都市を造っていくべきなのだろうと思う. その美は自然が与えてくれる秩序の洗練から生まれる.

後記. 芦原先生, あなたが模索して止まなかった「隠れた秩序」は目の前にあったのですよ. 美が感じられない日本の都市を, 美イコール秩序だと考えたのが間違いの元だったのだと思います. 久しぶりに根を詰めて考えたので, 正直の処, 些か疲れしました. ただし, こういう本質的な問題を, ああでもない, こうでもない, と考えるのが研究の醍醐味なのだと思います.

参考文献

- A. 芦原義信の著述
 - 1) 外部空間の構成, 彰国社, 1962
 - 2) 外部空間の設計, 彰国社, 1975
 - 3) 街並みの美学, 岩波書店, 1979
 - 4) 続・街並みの美学, 岩波書店, 1982
 - 5) 隠れた秩序—二十一世紀の都市に向って, 中央公論社, 1986
 - 6) 東京の美学, 岩波新書, 1994
 - 7) 秩序への模索—これからの都市・建築へ向って, 丸善, 1995
 - 8) 東京の美学—混沌と秩序, 市ヶ谷出版, 1998
- B. その他都市デザイン論
 - 9) 伊藤ていじ; 日本デザイン論, SD 選書, 鹿島出版会, 1966
 - 10) 伊藤ていじ他編; 日本の都市空間, 彰国社, 1968
 - 11) 楨彦彦他; 見えがくれする都市, SD 選書, 鹿島出版会, 1980
- C. 日本語論
 - 12) 熊谷高幸; 日本語は映像的である—心理学から見えてくる日本語のしくみ, 信曜社, 2011
 - 13) 北山修編; 共視論, 講談社, 2005
- D. 景観論
 - 14) 篠原 修; 土木景観計画, 技報堂, 1982
 - 15) 篠原修; 前川國男の5原則—モダニズム建築に都市への貢献は不可能だったのか, 景観・デザイン研究講演集 No. 6 2010
 - 16) 田中毅; 都市空間の構造の把握に関する基礎的考察—案内図を題材にして, 東京大学工学部社会基盤工学科卒業論文, 2005
 - 17) 平野勝也, 篠原修; 日本におけるヴィスタ設計の受容と変容, 土木計画学研究講演集 15, 1992